

「男、突っ走る！」

第47回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (20)

名古屋芸術専門学校2年生

木内 真孝 (49)
木内 健次郎 (16)
木内 保志 (47)

雅也の父
雅也の母
雅也の弟

木濱 志悠 寧瞬 (20)
田崎 喜々々 (20)
山崎 樹喜 (20)
田邊 良樹 (20)
高山 康一 (20)
山階 磨 (20)

中央高校元生徒
中央高校元生徒
中央高校元生徒
中央高校元生徒
中央高校元生徒
中央高校元生徒

宮頭 春奈 (20)
鬼川 美奈 (20)
五十川 彩奈 (20)
藤野 真孝 (20)

中央高校元生徒
中央高校元生徒
中央高校元生徒
中央高校元生徒

1 木内家・居間（朝）

新聞を読んでいる孝志——テレビを見ている健次郎。

玄関の開閉音が聞こえ、真保が入ってくる。

真保「ただいま。雅、準備できてるよ」

孝志「お、着付けやつてもらってきたか」

真保「朝こんなに早くから着付けだもんね、

お店の人も大変よ」

健次郎「兄ちゃんは？」

真保「外にいるわ」

2 同・表

孝志、真保、健次郎が出てくる——羽

織袴姿の雅也が立っている。

孝志「おお、良いじゃないか」

健次郎「すげえ」

雅也「とうとう成人式でございますよ」

真保「せっかくだし、写真でも撮る？」

雅也「良いね」

健次郎「デジカメ持ってくる」

× × ×

雅也と真保が並び、孝志がデジカメで
写真を撮影する。

雅也「次、父さん隣」

孝志、真保と交代する——真保がデジ
カメで写真を撮影する。

健次郎「俺も映りたい」

雅也「はいはい」

健次郎、孝志と入れ替わり、雅也の隣
に映る——真保がデジカメで写真を撮
影する。

雅也「（健次郎に）あ、健。父さんと母さん
を両サイドにした、三人の写真撮って」

健次郎「はいよ」

と、孝志からデジカメを受け取る——
雅也を中心に、両側に孝志と真保が並
ぶ。健次郎がデジカメで写真を撮影す
る。

N「二〇一六年の年が明けてすぐ、僕は成人

式を迎えました。早朝から、袴の予約をした呉服屋で着付けをしてもらい、せわしい一日が始まるうとしていました」

3 総合体育館・表

真保の運転する車が停まり、雅也が降りてくる。

真保「じゃあ、奥の駐車場に停めてくるから。何かあったら連絡して」

雅也「うん、分かった」

と、真保の運転する車が出発する――歩いていく雅也。そこへ、女性の声はどこからか聞こえる。

女性の声「うっちー！」

雅也、周囲を見渡す。

女性の声「ママッ！」

雅也、周囲を見渡す。

女性の声「こっちだって」

雅也、少し遠くを眺める――停車している車の後部座席から、顔を出した女

性が見える。

雅也「段々と近づいていく——車の中から真っ赤な振袖姿の女性が車から降りてくる。出発していく車。」

雅也「（女性を見て）濱口ッ……！」

女性は、寧々である。

寧々「久しぶり」

雅也「いや、高校の卒業式以来か」

寧々「そうなるね」

雅也「元気してた？」

寧々「うん。ママこそ、スーツかと思ったら

袴なんだ」

雅也「ずっと決めてたの。成人式は、絶対に羽織と袴にしようって」

寧々「お正月のバラエティ番組のMCに見えるよ」

雅也「何てことを」

寧々「もしかして、あれ？ お馴染みの大喜

利番組にでも出るの」

雅也「あれは生放送じゃないから」

寧々「突っ込みのキレは相変わらずね」

雅也「当たり前前でしょ。三年間で、どれだけ濱口に鍛えられたことか。まあ、今の専門学校でも、散々みんなからいじられてるけど」

寧々「そりゃ、ママはいじられキャラでずつとやってきたんだもの。今更キャラ変なんて無理でしょ」

雅也「まあねえ」

寧々「てか、まだほとんど来てないね」

雅也「ちよつと、早すぎたかなあ」

4 同・玄関前

新成人たちがぞろぞろと集まって談笑をしたり、記念撮影をしている。中には、奇抜な髪型やメイクで旗を持った袴姿の男子や、スーツ姿の男子もいる。エンジンをふかした車のマフラー音も聞こえている。

その中で、雅也が周囲を見渡すと、誰

に肩を叩かれる――振り向くと瞬が立
っている。

雅也「きのしゅん……」

瞬「久しぶり、うちー」

雅也「元気だった？」

瞬「ああ」

雅也「かどけんと同じ通信制高校に行ったの
は聞いてて、一緒に卒業もできたんだっ
て？」

瞬「そう。今は、期間工で働いてる」

雅也「無事に就職もできて、良かったね」

瞬「うちーは、専門学校だっけ？」

雅也「うん。脚本を学ぶために入ったはずな
のに、地域雑誌作ったり、イベントの実行
委員やったり、いろいろやってる」

瞬「変わらないね、うちーは」

雅也「（苦笑して）まあね。あれ、今日かど
けん一緒じゃないの？」

瞬「今日、来ないよ。あいつ」

雅也「どうして？」

瞬「いつものところに行ってる」

雅也「まさか……競艇場？」

瞬「うん」

雅也「マジか……あいつ……」

呆れ顔の雅也。

5 同・全景

N 「成人式の式典も、滞りなく終わった後、
会場の表では再び同窓会さながらの状態が
続いていました」

6 同・表

新成人たちが、写真を撮り合ったり談
笑したり、騒がしくしている。中には、
赤ん坊を抱いた新成人や、厳つい連れ
が黒いセダンの前で立っていたりして
いる。

雅也が歩いている——スーツ姿の良樹
と一磨に気が付く。

雅也「かっちゃん、良樹ッ」

一磨「久しぶり、似合ってるじゃん着物」

雅也「ありがとう」

良樹「写真撮るか」

雅也「ああ、そうだね」

一磨「あ、待って。康行呼んでくる」

一磨、康行を連れてくる。

雅也「康行ッ」

康行「おお、木内ッ」

良樹「よし、揃ったな。撮るぞ。はい、チー

ズ」

と、良樹のスマホで自撮りをする。

一磨「グループ送っというて」

良樹「あいよ」

一磨「ねえ、また四人で集まろうよ」

康行「そうだね。グループLINEでやり取

りはしてても、四人揃って遊ぶこともなく

なっちゃってるもんね」

良樹「木内も忙しそうだし」

雅也「俺は、ちゃんとみんなのためなら時間

作るよ」

良樹「言ったな？」

雅也「もちろん」

良樹「じゃあ、決定だ」

雅也「うん」

と、雅也のスマホに着信が来る。

雅也「ちよつとごめん。（と電話に出ると）

もしもし？」

スマホから春奈の声が聞こえる。

春奈の声「パンテーン、今どの辺にいる？」

雅也「（電話に）今、昇降口の近くの階段の
ところ」

春奈の声「あ、いた。右向いてみて」

雅也、振り向くと、スマホを耳に当て
た春奈、その後ろに孝之、美彩が待っ
ている。

雅也「（電話に）いた」

と、電話を切ると、春奈たちの元に合
流する。

孝之「お久しぶりです」

雅也「久しぶり、五十川君。さすが、立派な

スーツで」

五十川「いやいやいやいや、木内さんこそ似合ってますよ」

美彩「落語家みたい」

雅也「それね、十人中九人に言われたわ」

美彩「後の一人は」

雅也「正月のバラエティ番組のMCって」

美彩「分かる気がする」

春奈「ほら、撮るよ」

と、スマホで自撮りする——写真に収まる雅也たち。

雅也「五十川君、次はいつこっちに帰ってくるの？」

五十川「次は、夏ですかね」

雅也「じゃあ、その時に四人でまた集まろうよ」

美彩「そうだね。一年近く、何だかんだ会えてなかったもんね」

春奈「じゃあ、次の予定は決まりだね。夏、五十川がこっちに帰ってきたときに、四人

で集まると」

雅也「また、連絡取り合って予定合わせよう」
春奈「何だか、すっかりまとめてるの上手くなってきたね」

美彩「SNSでいつも見てるよ。専門学校で随分忙しくしてるみたいじゃん」

雅也「まあね」

五十川「夏を楽しみに、お互いまた頑張りましょう」

頷き合う一同。

×

×

×

雅也が歩いていると、真弓とすれ違う。

真弓「ツリーインッ！」

雅也「真弓さんッ」

真弓「久しぶり……と言っても、ドラマ撮影以来か」

雅也「あの時は、本当にお世話になりました」

真弓「作業は順調？」

雅也「今、監督やった大久保が、一生懸命編集作業してる」

真弓「完成楽しみだな」

雅也「編集が終わったら、データ送るね」

真弓「うん、ありがとう。ねえ、せっかくだ

から写真撮ろうよ」

雅也「OK」

真弓、近くの友人にスマホを渡す――

写真に映る雅也と真弓。

7

木内家・居間

ジャージに着替えた雅也が、ソファ―
に寝転がる――台所で昼食の支度をし
ている孝志。

孝志「もう疲れたのか？」

雅也「着物がこんなに疲れるとは思わなかつ

た」

孝志「二次会の会場に、先に行かなきゃいけ
ないんだろ」

雅也「うん。でも、ちよつと休憩させて。今

日一日長いんだから、少し休まないと身体
持たないの」

苦笑して雅也を見る孝志。

8 ホテル・ロビー

孝志の運転する車が停まり、スーツ姿の雅也が降りてくる。

孝志「終わったら、また連絡しろ。まあ、どうせいろいろ喋ったりするだろうから、すぐには終わらないと思うし、三次会もあるんじゃないか？」

雅也「分かんない、また連絡するわ。ありがとう、それじゃ」

孝志の運転する車が発し、雅也が中へ入っていく。

9 同・パーティー会場前

同窓会幹事の同級生たちが準備をしている——雅也が合流する。

雅也「お待たせ」

幹事A「待ってたよ、木内君」

雅也「手伝うわ」

× × ×

同級生たちが次々とやってくる――受付で対応している雅也や幹事の同級生たち。

雅也「三年三組は、こちらです」

と、同級生たちがやってくる。

雅也「（笑顔で迎えて）ああ、久しぶり。

（と名簿にチェックして）また後でゆっくりと」

10 同・パーティー会場内（夜）

食事をしたり酒を飲んだり、立食形式で同級生たちが談笑している。

テラス席で話している者、喫煙室で煙草を吸いながら話している者、様々である。

雅也が、食事をしながら一磨と良樹と話している。

雅也「そうだった。康行は中学、違ったんだ」
良樹「中学から一緒のメンツが混合してると、

どうしても記憶がクロスオーバーしちゃう

よね」

一磨「分かる。俺もさ、『あれ、この子中学から同じだっけ？』と思ってたら、結局高校でしか一緒じゃなかったんだよね」

雅也「酷い子なんてね、中学高校で一緒だった子から、『小学校から一緒だよな』って言われて」

一磨「ええ？」

雅也「『ちげえわ！』って否定したよね」

良樹「地元の学校に通つてると、どうしてもそういう錯覚起こすよな」

雅也「高校まで地元を出たことがなかった俺たちが、今や名古屋まで大学やら専門学校に行ってるんだもんね」

一磨「都会デビューからもう少して二年か」
雅也「二人は大学だから、あと二年あるんだもんね」

良樹「そっか、木内は専門だからもう終わり？」

雅也「ううん、うち三年課程だから、あと一年ある」

一磨「この一年で、ちゃんと決まると良いね。

脚本のほう。応援してる」

雅也「（微笑んで）うん、ありがとう」

11 同・ロビー

同級生たちが、そろそろと出ていく―

―雅也も出てくる。

N「二次会の後、会場を移して、今度はクラスに別れた三次会が開かれました」

12 居酒屋・一室（夜）

三次会の会場。

雅也と良樹、同級生たちと飲みながら話している。

同級生A「そっか。木内は、高校でも専門でも、リーダーとかばっかりやってるんだ。

まあ、当時から部活の部長とか、クラス議員もやってたもんな」

良樹「そういうのが合ってるんだよ、木内は」

雅也「そうかな」

同級生 B「じゃなかったら、同窓会のクラス

幹事だってやらないだろ、普通」

雅也「それなんだよ。俺さ、高校の同窓会の

幹事は自分でやるって立候補したのは覚え

てるんだけど、この中三のクラス幹事をや

るって言った覚え、俺ないんだよ」

同級生 B「そうなの？」

雅也「中学の卒業式の時の名簿にさ、クラス

幹事にはマルが打ってあったでしょ。俺、

その時初めて、自分がクラス幹事になった

こと知ったんだもん」

同級生 A「勝手に決められてたってこと？」

良樹「あ……思い出した」

雅也「え？」

良樹「三学期さ、木内、インフルで何日か休

んだ日なかった？」

雅也「……あった」

良樹「多分、その時に決められてたんじゃな

いかな」

雅也「マジか……」

同級生A「でも、可能性はあるかもな」

雅也「普通、休んでる人に勝手に決める？

それに、俺以外だってこのクラスじゃ、幹事できそうな人いるだろうに」

良樹「いやいや、こういう役回りは、結局木内が似合ってるんだよ。現にやり遂げたじゃん、よん、今日の幹事だって」

雅也「まあね」

同級生B「そういう星の元に生まれちゃったんだよ、木内は」

苦笑して、グラスの酒を飲み干す雅也。

13 同・表

ぞろぞろと出てくる同級生たち——雅也が、泥酔している同級生を介抱している。

雅也「大丈夫？」

同級生C「（しやがみこんで）大丈夫、大丈夫

夫。ごめんね、木内君」

雅也、近くにある自販機で水を慌てて
買うと、同級生Cに渡す。

雅也「はい、お水」

同級生C「ありがとう。ちよつと、休むわ」

と、壁にもたれる――見守るように隣
に座る雅也。そこへ、他のクラス会と
思われる新成人たちもぞろぞろと出て
くる。その中に、悠喜がいる。

雅也「志田ッ……」

悠喜「おお、木内」

雅也「あれ、クラス会ここでやってたの？」

悠喜「ああ。まさか、木内、隣の席だった
か？」

雅也「そういうことだね」

悠喜「飲んだか？」

雅也「ほどほどに、ビールと梅酒だけ。まだ
他のお酒はどうも飲めなくて」

悠喜「俺も、そこまでだな」

雅也「これから、覚えていくんだろな」

悠喜「そっちは、もう終わりか？」

雅也「四次会もあるみたいなんだけど、（と
同級生Cを見ながら）この子の介抱もしな
きゃいけないし、俺も体力の限界」

悠喜「潰れるまで飲んじゃったのか？」

雅也「調子こいて、テキーラのショットをガ
ブガブと。後から酔いが回ってきたんだよ」
悠喜「そりや大変だ」

と、悠喜の友人の声がする。

友人の声「おい、志田。行くぞ」

悠喜「はいはい。（と雅也に）じゃあまたな。

おっちゃんたちと、また集まろう」

雅也「うん、じゃあね」

去っていく悠喜を見送りつつも、同級
生Cを見守る雅也。

N「久しぶりの同級生たちとの再会は、本当
に幸せな時間でした。ここから一週間近く、
僕は同窓会の余韻に浸っていたのでした」

つづく